

# 中村町遺跡2

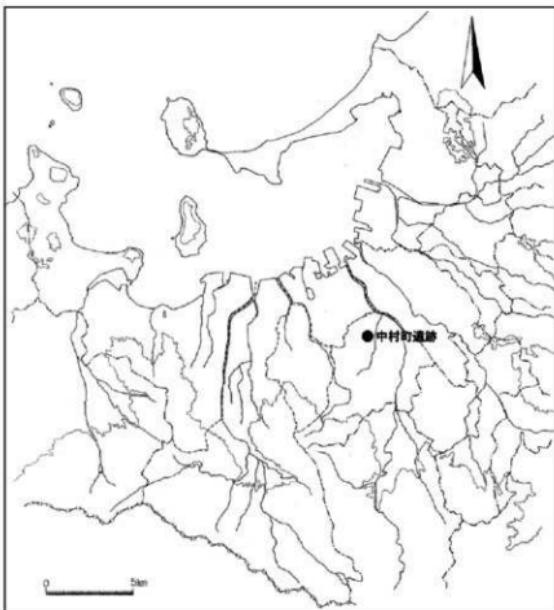
—中村町遺跡第3次調査報告—

2006

福岡市教育委員会

# 中村町遺跡2

—中村町遺跡第3次調査報告—



調査番号 0473  
遺跡略号 NMM-3

2006

福岡市教育委員会



卷頭写真1 調査区全景(北から)



卷頭写真2 南端部豎穴住居跡群(西から)

## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する中村町遺跡第3次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで株式会社穴吹工務店をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

## 例　言

- 本書は福岡市教育委員会が平成16年度に南区野間3丁目117・118番において実施した中村町遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測は長家伸が行った。
- 遺物の実測は長家、吉留秀敏、平川敬治、撫養久美子が行った。
- 製図は長家、吉留、撫養が行った。
- 写真は長家が撮影した。
- 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
- 本書で用いる遺構番号は通し番号にし(一部欠番あり)、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物(SB)、竪穴住居跡(SC)、土坑(SK)、不明遺構(SX)、ピット(SP)である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
- 本書の編集・執筆は石黒(96)を吉留が行った他は長家が行った。

遺跡調査番号	0473		遺跡略号	NMM-3	
所在地	南区野間3丁目117・118番			分布地図番号	51-0167
開発面積	5,087.93m <sup>2</sup>	調査対象面積	5,087.93m <sup>2</sup>	調査面積	844m <sup>2</sup>
調査期間	平成17年1月11日～平成17年2月28日			事前審査番号	16-2-781

## 本文目次

I	はじめに.....	1
1	調査にいたる経過.....	1
2	調査体制.....	1
II	調査の記録.....	2
1	調査経過.....	2
2	遺構と遺物.....	8
1)	掘立柱建物.....	8
2)	竪穴住居跡.....	8
3)	その他の遺構と遺物.....	21
4)	小結.....	25

## 挿図目次

第1図	調査区位置図1(1/50,000) .....	3
第2図	調査区位置図2(1/4,000) .....	4
第3図	調査区位置図3(1/500) .....	5
第4図	調査区全体図(1/200) .....	6
第5図	調査区南側全体図及び土層図(1/80) .....	7
第6図	SB016及び出土遺物実測図(1/40、1/3) .....	8
第7図	SC001及び出土遺物実測図(1/50、1/2、1/3) .....	9
第8図	SC002及び出土遺物実測図(1/50、1/3) .....	10
第9図	SC003・004・006及び出土遺物実測図(1/50、1/3) .....	11
第10図	SC005実測図(1/60) .....	13
第11図	SC005出土遺物実測図(1/2、1/3) .....	14
第12図	SC007・014及び出土遺物実測図(1/50、1/3) .....	15
第13図	SC008及び出土遺物実測図(1/50、1/1、1/3) .....	17
第14図	SC009及び出土遺物実測図(1/50、1/3) .....	18
第15図	SC010実測図(1/50) .....	19
第16図	SC010出土遺物実測図(1/3) .....	20
第17図	SC015及び出土遺物実測図(1/50、1/1、1/3) .....	22
第18図	SX012実測図(1/60) .....	23
第19図	SX012出土遺物実測図(1/3) .....	24
第20図	その他の遺構・遺物実測図(1/30、1/3) .....	25

## 写真目次

卷頭写真1 調査区全景（北から）	28
卷頭写真2 南端部竪穴住居跡群（西から）	
写真1 台地部全景（北から）	26
写真2 調査区全景（北から）	26
写真3 竪穴住居跡群（西から）	26
写真4 調査区南側（北から）	27
写真5 台地縁辺土層	27
写真6 SC001（南西から）	28
写真7 SC002（西から）	28
写真8 SC003（北西から）	28
写真9 SC005（西から）	28
写真10 SC007（西から）	28
写真11 SC007遺物出土状況（北から）	28
写真12 SC008・009（西から）	29
写真13 SC010（西から）	29
写真14 SC010遺物出土状況（東から）	29
写真15 SC014（東から）	29
写真16 SC008・009・015（西から）	29
写真17 SC015（西から）	29
写真18 SC015P-1 土層	30
写真19 SX012（南西から）	30
写真20 SC012土層	30
写真21 SP137土層	30
写真22 出土遺物（24）	30



写真1 台地部全景（北から）

## I はじめに

### 1 調査にいたる経過

平成16年11月16日付けで株式会社穴吹工務店 代表取締役 穴吹英隆氏より福岡市教育委員会宛に福岡市南区野間3丁目117・118番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号16-2-781)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中村町遺跡(分布地図番号51-0167・遺跡略号NMM)に隣接している地点である。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成16年12月2日及び8日に申請地内の試掘調査を行い、対象地の南西隅部分において表土直下で丘陵を確認し、ピット・竪穴住居跡等を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成18年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお申請地5,087.93m<sup>2</sup>のうち、調査対象としたのは1,000m<sup>2</sup>で、その他については湿地状となり遺構がないことが確認されたため調査対象外としている。なお平成16年度に契約変更を行い資料整理・報告書作成は平成17年度に行うこととしている。

発掘調査期間は平成17年1月11日～平成17年2月28日である(調査番号0473)。調査面積は844m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ25箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社穴吹工務店の皆様をはじめとする関係の方々から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

### 2 調査体制

事業主体 株式会社穴吹工務店 代表取締役 穴吹英隆

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文課財課長 山口譲治

調査第2係長 池崎譲二

調査庶務 文化財整備課 御手洗清(前任) 鈴木由喜(現任)

調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 来野孝子 中島道夫 川下信弘

## II 調査の記録

### 1 調査経過

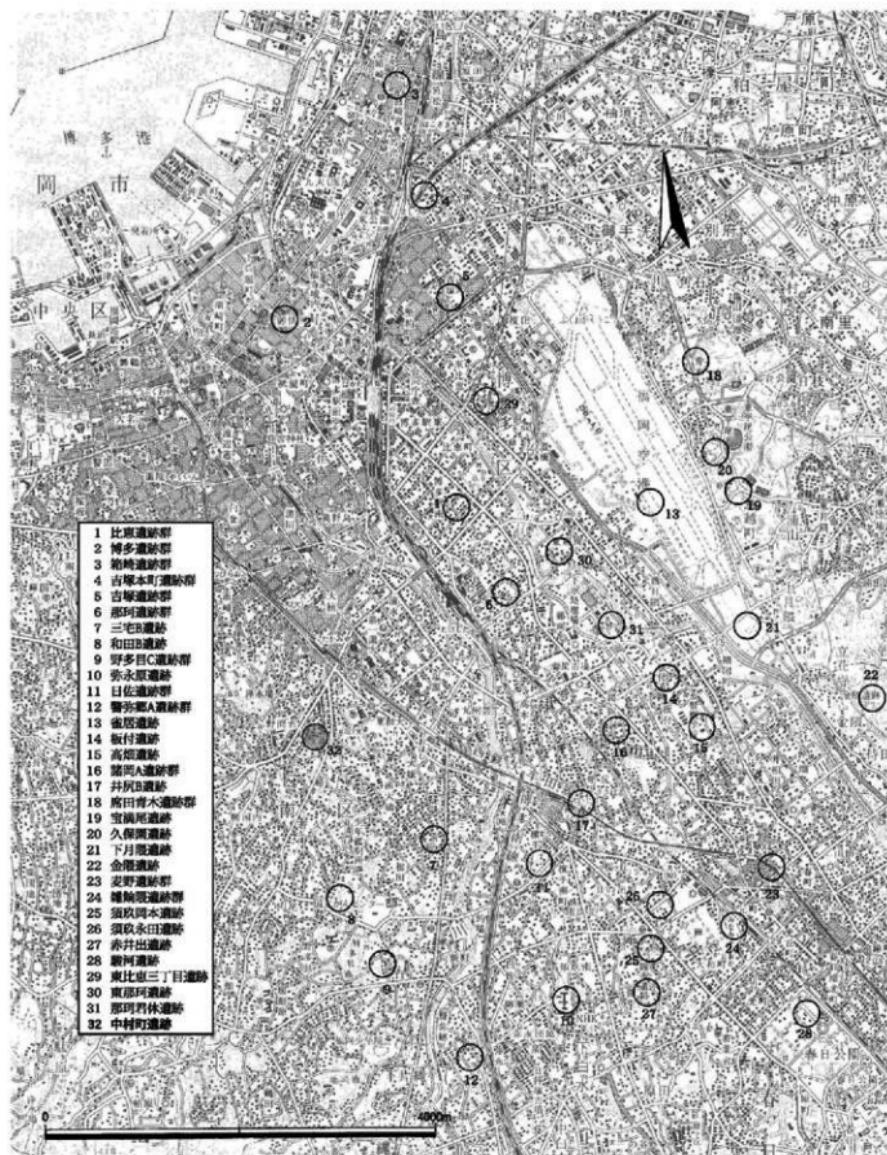
中村町遺跡は片郷山から北～北東部に延びる第3紀層を基盤とする台地の南側先端部分に位置し、低地部を挟んだ北側には樋井川と那珂川を分ける鴻巣山(100m)を中心とする丘陵群が分布している。今回の調査地点は沖積地に面する台地の最先端部にあたり、丘陵東側斜面部では風化岩盤上を粗砂・シルトの水成堆積層が厚く覆っている。

中村町遺跡は前述の台地上に立地する遺跡で、これまでに2度の調査が行われている。第1次調査は台地の頂部からやや南側に下った地点の調査である。調査以前の造成工事により旧地形は残っていないが、削平が比較的少なかった調査区南東部と西部で古墳時代後期の竪穴住居跡12棟及び飛鳥時代にかかる大型建物1棟を確認している。竪穴住居跡は全体に遺存状況が悪いが、住居内から甕が確認されている。また大型建物は尾根線に平行して建てられ、桁行6間(12.72m)を測り、掘り方は方形～長方形を呈するものである。(『中村町遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第373集 1994) 第2次調査は道路建設に伴って行われた調査である。調査区は台地西側の縁辺部分にある。客土以下河川性堆積物が認められ、地表下約2mの青灰色粘質土上面で土坑・ピットを確認し、土器類・須恵器等が出土している。なお遺構面以下には粘質土・粗砂層が堆積しており、調査区は台地前面の沖積地部分に当たり、集落からは外れている。(『福岡市埋蔵文化財年報Vol.11 1996年度』 1998)

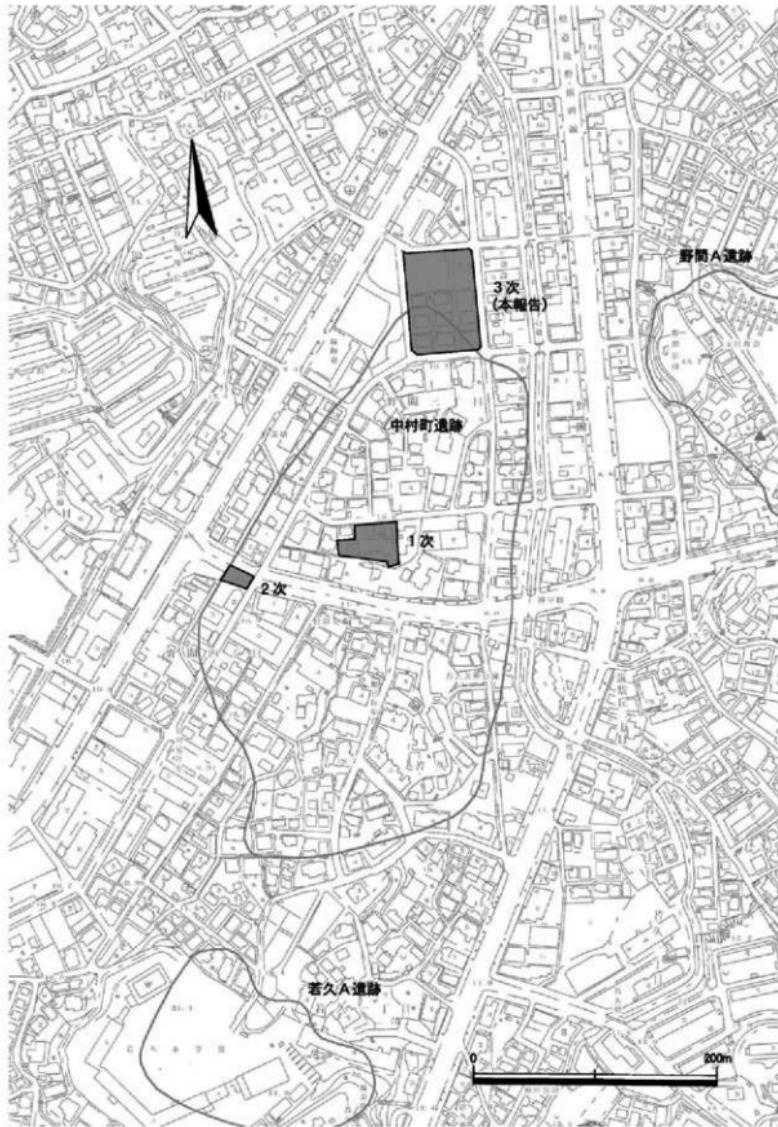
以上2回の調査が行われているが、全体に台地上の開発が古い時期に行われているため、その様相については不明な点が多い。

今回の申請地は台地の最先端部分および台地前面の沖積地にあたる。調査前は全体が日本銀行の社宅となっており、南西側を最高所として階段状に造成されていた。調査前標高は南西隅11m、南東隅8.2m、北端7.6mであった。試掘調査の結果申請地の南西部を中心に台地の舌状先端部が残っており遺構が確認されたため、南西部から台地を追うように表土剥ぎを行った。その結果申請地の南西部を中心に表土直下～70cmで風化岩盤の地山を確認した。また台地西側ではこの風化岩盤上面に水成堆積で無遺物の粗砂・シルト・粘質土が堆積し、この上面から遺構が掘り込まれていた。また台地西～北側には沖積地が形成されているが、その上面は台地を削平した土での埋め立てが行われている。特に台地西側では直線的に高さ2mほど切り落とされており、更に西側の沖積地部分には機械的に掘削された不整形な擾乱が広がっており、擾乱埋土には弥生時代中期～古墳時代後期の多くの遺物が含まれていた。このことからもかつては台地上に同時期の遺構が相当数残されていたと想定できる。前述のように削平が非常に進んでいたため、遺構は調査区南西部の150m<sup>2</sup>ほどの地点に特に密集して確認している。検出した遺構は掘立柱建物、竪穴住居跡、土坑、ピットで、特に竪穴住居跡が主体を占める。また時期的には弥生時代終末～古墳時代初頭を中心として、一部は古墳時代後期に位置付けられる。

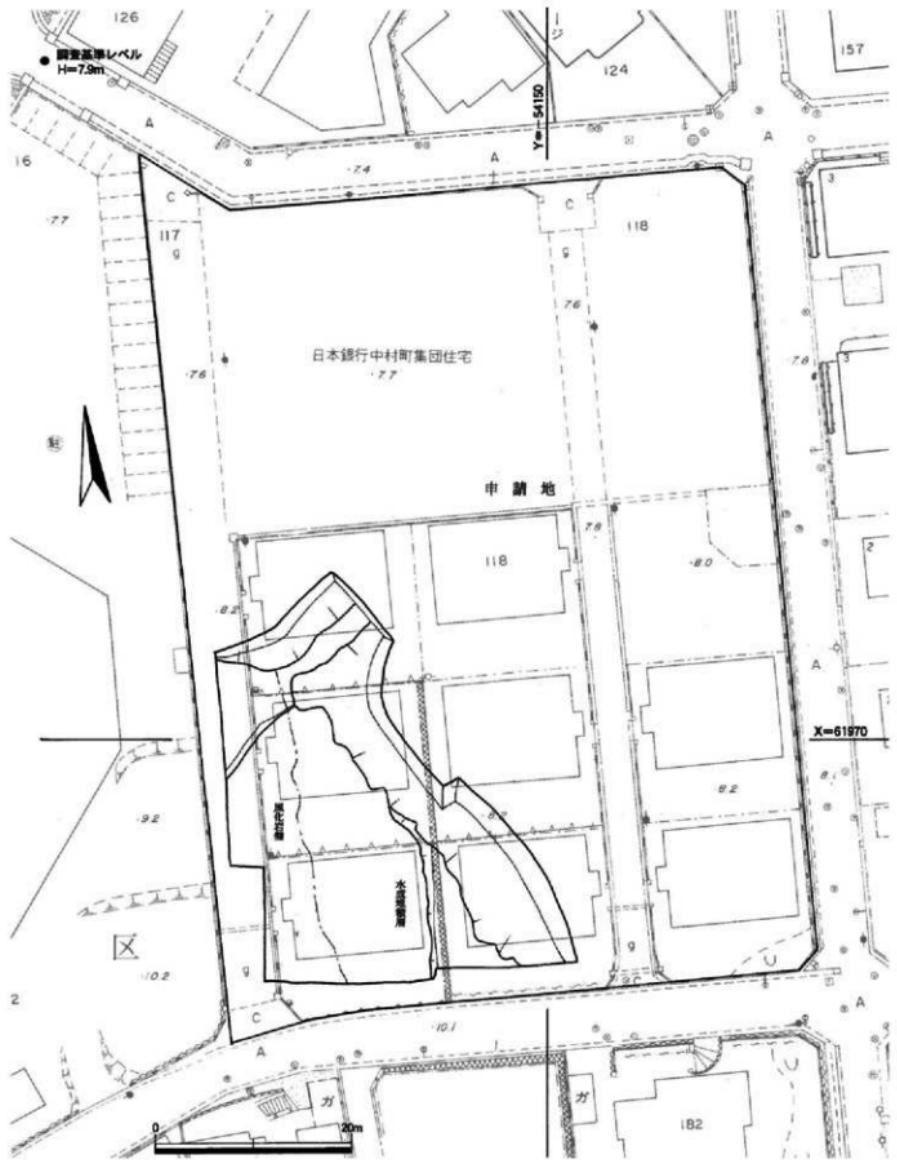
なお調査に用いた標高は都市計画図より拾い上げた数字(道路中央H=7.90m)を基準として採用した(第3図)。



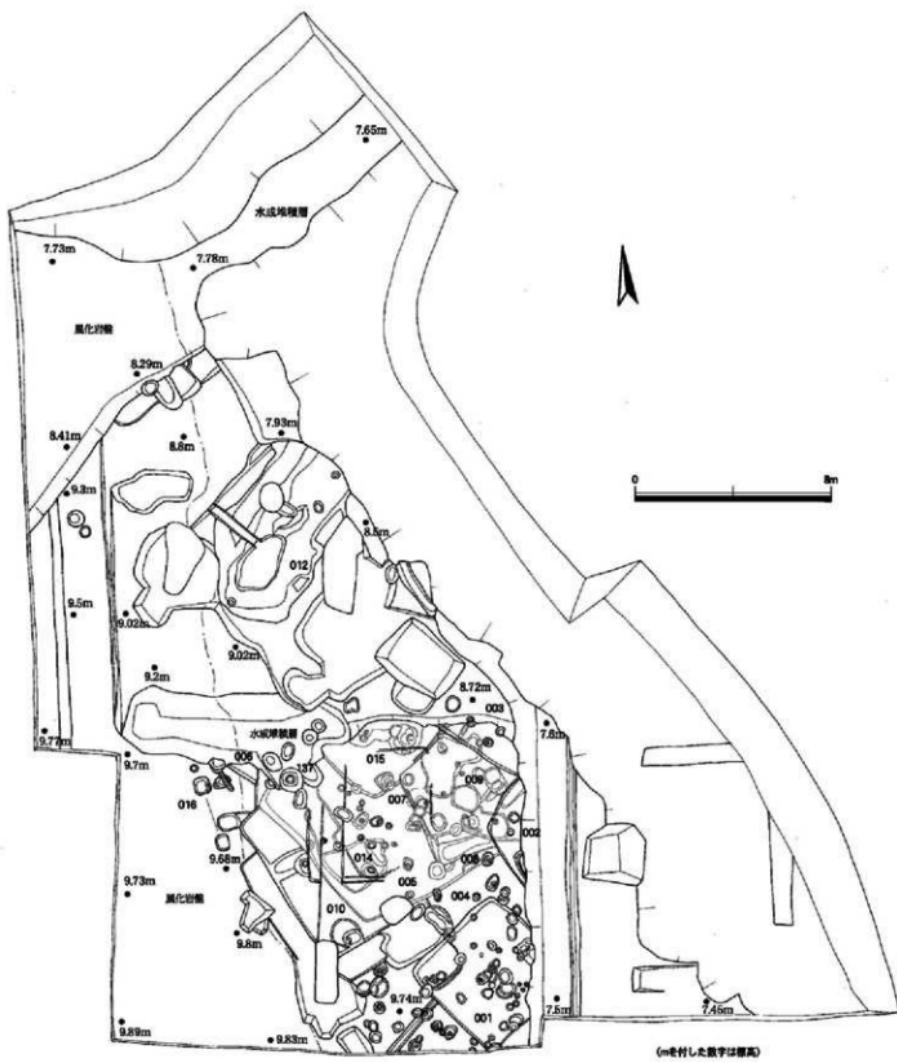
第1図 調査区位置図1 (1/50,000)



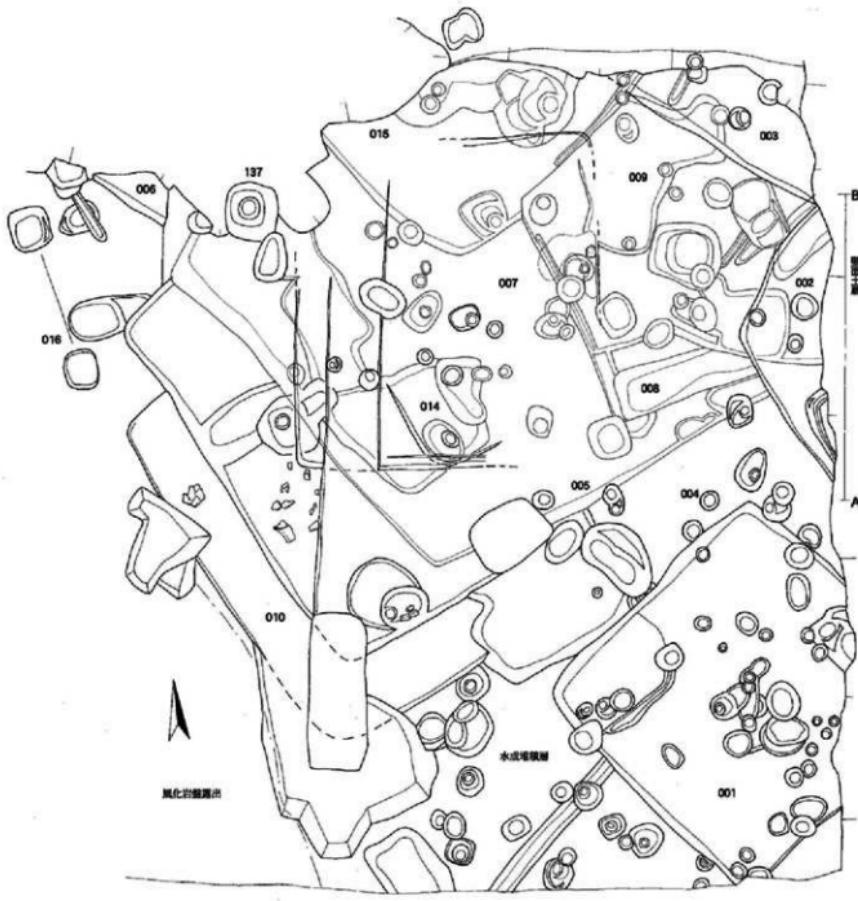
第2図 調査区位置図2 (1/4,000)



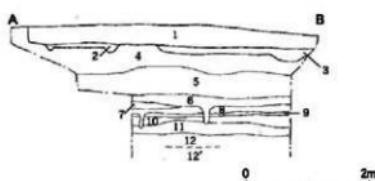
第3図 調査区位置図 3 (1/500)



第4図 調査区全体図(1/200)



H=10.0m



1. 暗褐色土(SC002 塵土)
2. 暗褐色土(SC002-b 塵土)
3. 暗褐色土(SC009 塵土)
4. 暗黃褐色土(きめ細かいシルト質の部分あり)
5. 黒色粗砂
6. 明黄褐色粘質土
7. 粗砂
8. 明黄褐色粘質土
9. 黑色土
10. 淡茶褐色粘質土
11. 暗褐色粘質土
12. 明黄褐色粘質土
- 12' 12層がグライ化する

4~12層は縁辺に堆積する水成土である

第5図 調査区南側全体図及び土層図 (1/80)

## 2 遺構と遺物

### 1) 挖立柱建物

#### SB016 (第6図)

掘り方形を呈する柱穴2基を確認した。これに関連する他の柱穴は認められないが、掘り方形などから豊穴住居跡に伴うものでなく、掘立柱建物を構成するものと考えた。柱穴は一边55~70cmを測り平面形はほぼ方形を呈する。検出面からの深さはそれぞれ120cm・40cmである。埋土は褐色土を基本とし、ともにほぼ中央に径25cmの柱痕跡が残っている。削平によって他の柱穴が失われているため建物の展開方向は不明瞭であるが、現状で方位はN-12°~Wである。少量であるが、弥生時代後期~終末期に位置付けられる遺物が出土している。

#### 出土遺物 (第6図)

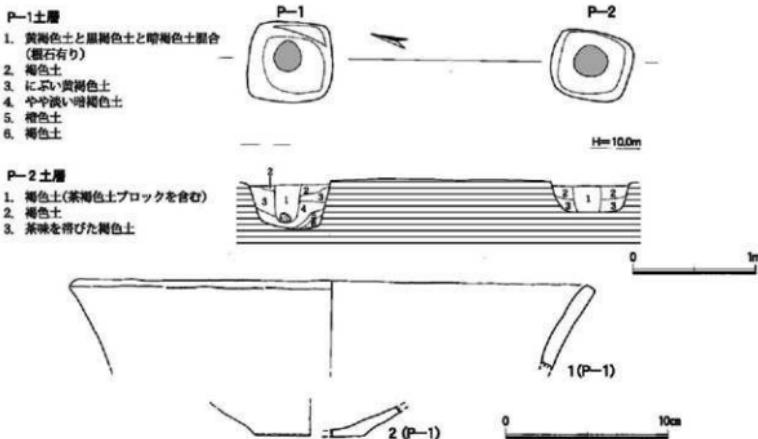
ともにP1から出土した土器である。1は甕の口縁部である。摩滅が進んでおり調整は不明であるが、僅かに外反して口縁端部にいたる。浅黄橙色を呈し、径1~3mmの石英砂粒を多く含んでいる。2はほぼ平底の底部である。胎土・色調は1に同じである。

### 2) 豊穴住居跡

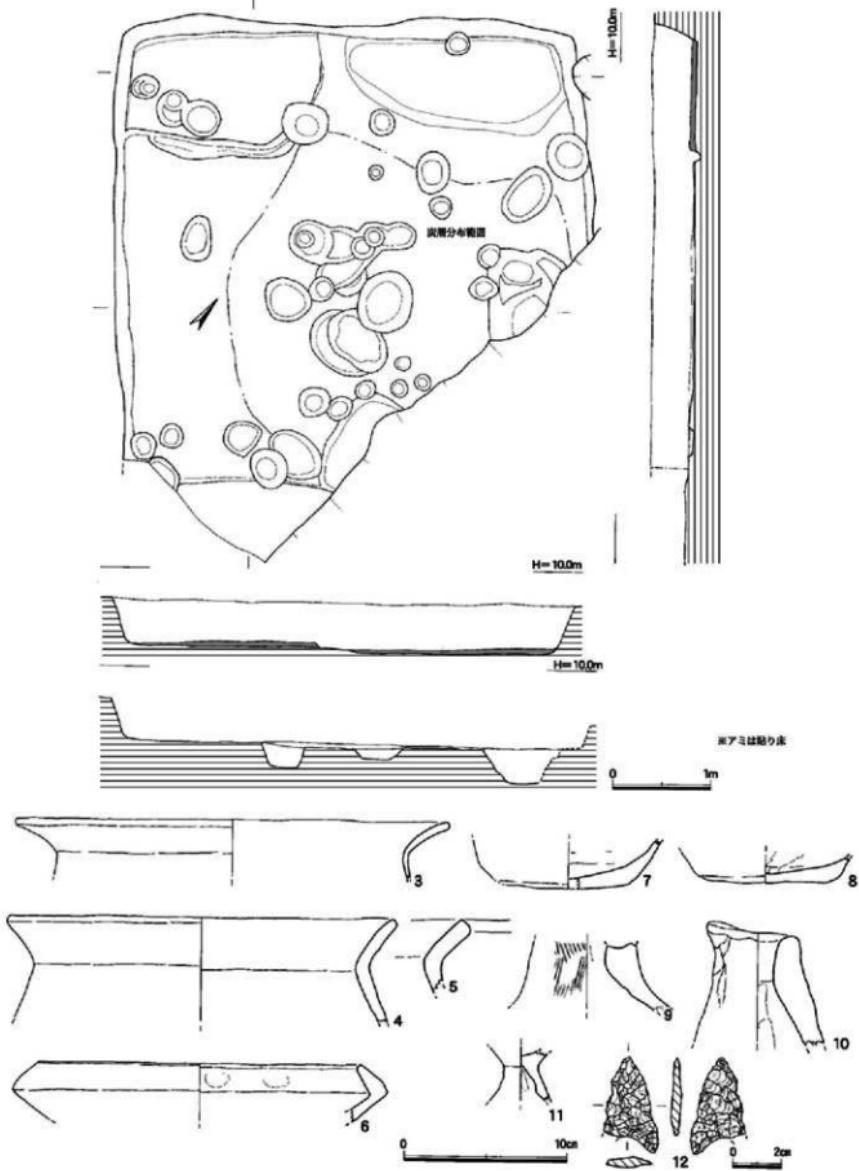
豊穴住居跡が本調査での検出遺構の主体である。削平のため調査区の一部(調査区南西端付近)ではあるが非常に密集して検出されており、本来は丘陵上に非常に濃密に生活遺構が展開していたものと考えられる。時期的には弥生時代終末期~古墳時代初頭に集中している。

#### SC001 (第7図)

本調査地点の豊穴住居跡群の中で最も南側に位置しており、東側は削平のため切り落とされている。南東側に削り出しのベッド状遺構を有し、西側コーナー部分の床面にも平面1.1×1.9m、高さ20cm程度の盛り土によるベッド状遺構を有している。平面は6m程度×4.9mの長方形に復元できる。検出面から床面までの深さは20~40cmを測る。住居埋土は上半部が暗褐色土、下半部が暗褐色土に黄褐色土ブロックを含むものとなっており、北西壁及び南東壁際に暗褐色土と暗黄褐色土の混合土による貼



第6図 SB016及び出土遺物実測図(1/40、1/3)



第7図 SC001及び出土遺物実測図（1／50、12は1／2、その他は1／3）

り床を行っている。また床面直上には中央部を中心として3.5m程度の範囲内で厚さ2cmほどの炭層が広がっている。明瞭な炭化材は認められず、被熱痕跡も確認できない。主柱穴は判然としない。弥生時代後期後半～終末期に位置付けられる甕、壺、器台、小型土器等の破片が出土している。

#### 出土遺物（第7図）

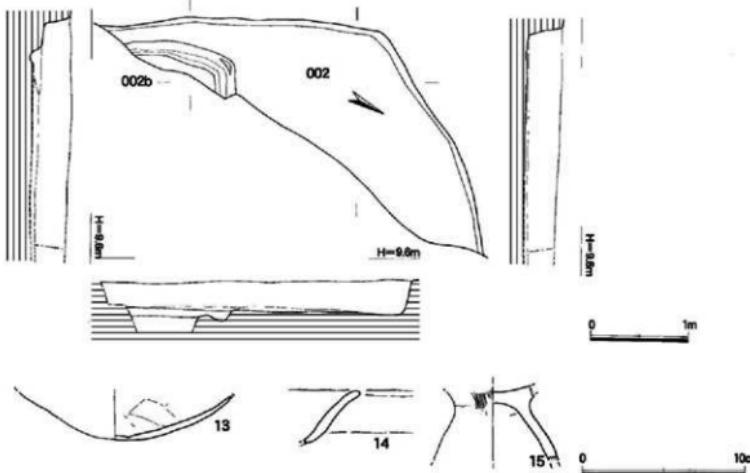
3～5は「く」字状に屈曲する甕の口縁部である。いずれも胎土に1～2mmの石英砂粒を多く含んでいる。6は複合口縁の壺口縁部である。屈曲部より上位は短く内傾している。7・8は底部破片である。共に外底面に刷毛目が残り、僅かにレンズ状を呈する。9は脚部である。外面綫刷毛を行い、内面は横方向のナデを行うものであろうか。上端部は接合面で剥落している。10は突起を有する器台である。外面は指押さえによる調整が顕著に残り、内面は縱方向の指ナデ痕跡が残る。色調浅黄橙色を呈し、石英砂粒を多く含む。11は小型の高環で、脚裾はラッパ状に広がる。調整は不明である。12は黒曜石製の石鏃である。

#### SC002（第8図）

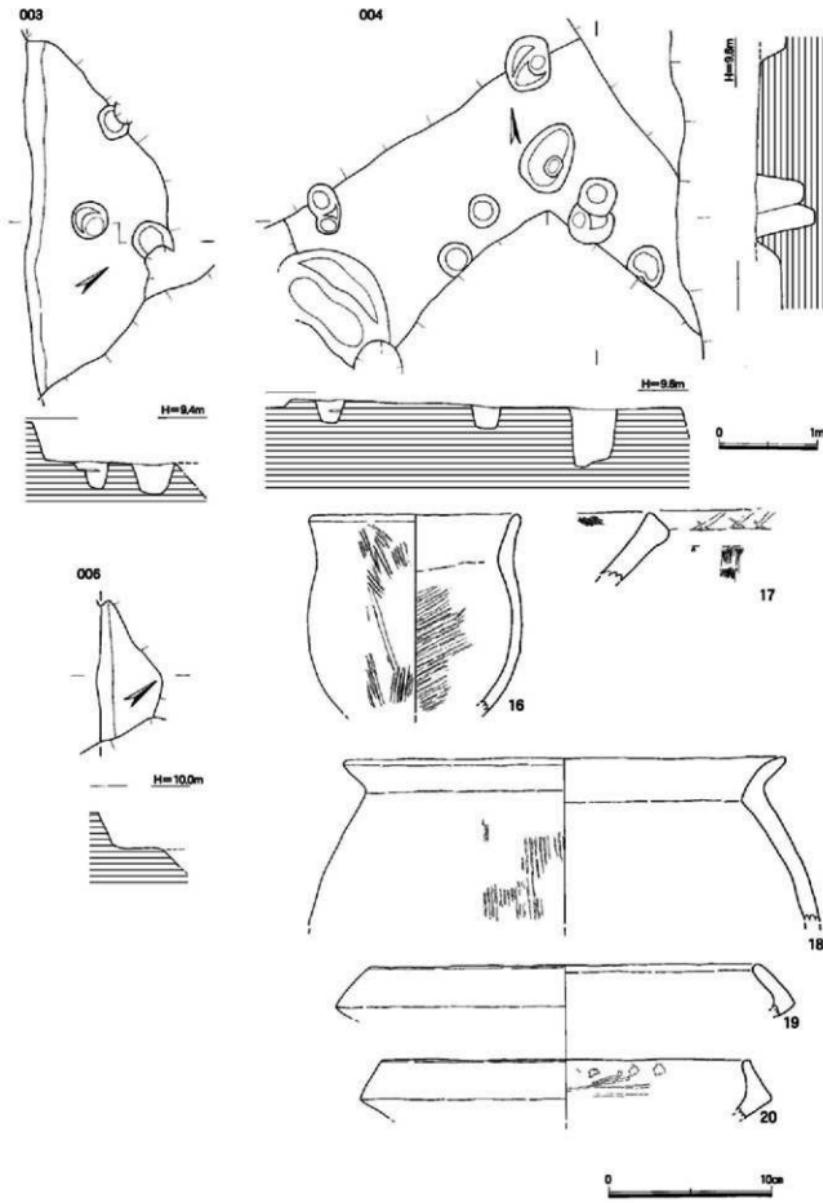
SC001の北側に位置し、同様の主軸方位をとる。平面的にはSC004・005・008・009を切って掘削されている。埋土は暗褐色土で検出面から床面までの深さ40cmを測る。床面上に別棟の整穴住居跡周溝の一部が認められた。便宜上SC002bとしたが本来的にはSC002と切り合う住居跡であり、先後関係は不明である。主柱穴・被熱痕跡等の住居内施設は認められず、削平部分も多いため構造等不明な点が多い。遺物はSC002bからは出土しておらず、SC002から甕、壺、高環等の小破片がコンテナ1箱程度出土している。

#### 出土遺物（第8図）

13は精選された胎土による底部である。長頸壺であろうか、痕跡的に直径3cm程の底部が観察できるが、ほぼ丸底となっている。色調はにぶい黄橙色を呈する。14は高環の口縁部である。屈曲部からは短く外反している。15は脚部である。屈曲部外面に綫刷毛が認められ、脚部内面は縱方向にナデ



第8図 SC002及び出土遺物実測図(1/50, 1/3)



第9図 SC003・004・006及び出土遺物実測図(1/50, 1/3)

を行っている。脚と接合する器の内面にはヘラ削りが施される。

#### SC003 (第9図)

SC002の北側に位置し、SC001・002と同様の主軸方位をとる。SC009を切って掘削されており、検出時にはこれよりもやや黒味を帯びた暗褐色土埋土で遺構確認を行ったが、掘り下げを進めるうちに埋土の違いが不鮮明となる。そのため結果的にSC009と同じ床面となってしまっているが、本来の床面はもう少し高いものと思われる。削平が大きく主柱穴・炉跡等の施設は認められない。小破片がコンテナ1箱出土している。

#### 出土遺物 (第9図 16・17)

16は小型の甕である。口縁部は外側を肥厚させる。調整は外面全体及び頸部内面に斜方向の刷毛目を施す。17は口縁部破片である。内外面に細かい刷毛目が残るが、ナデ消しを行っている。口縁端部は面取りを行い、ヘラで擣がけに刻みを施す。

#### SC004 (第9図)

SC001・002・005に挟まれ、南西側を擾乱で埋まれた部分に暗褐色土が20~30cm堆積している。壁面は確認できていないものの、豊穴住居跡の床面が露出しているものと考えられる。床面の標高は南西部で9.5m、北東部で9.35mを測り、東側に向かってやや傾斜している。SC005との先後関係は不明であるが、平面的な切り合い関係からSC001・002に先行するものと考えられる。破片が少量出土するのみである。

#### 出土遺物 (第9図 18~20)

18は甕である。口縁部はやや短めの「く」字形に屈曲する。外面に縦刷毛が認められる。19・20は複合口縁甕の口縁部である。19はやや丸みを帯びて内湾する。20は短く直線的に屈曲している。

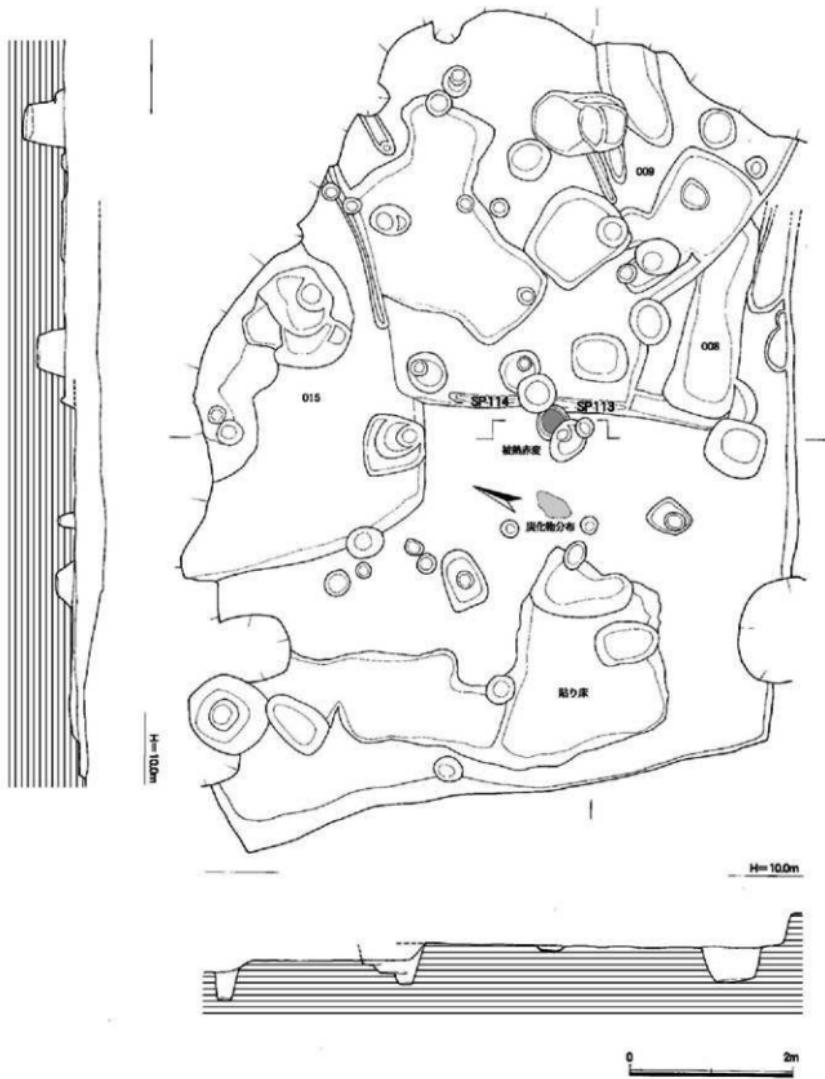
#### SC005 (第10図)

SC001の北側に位置する。東壁及び南壁が切り合い及び削平によって不明瞭になっているが7×8mの大型の豊穴住居跡に復元できる。東側はSC008を本来は切るものと考えられるが、SC009・015との切り合い関係は明らかでない。埋土は暗褐色土で周辺の豊穴住居跡とほぼ同じである。床面レベルは9.1~9.2mでは平坦であるが、西壁沿いの床面には褐色土を混合した貼り床が行われている。床面中央あたりに炉跡と考えられるSP113及びこれに関連するピットと考えられるSP114を検出している。SP113は径30~40cmの平面円形を呈し、床面からの深さは8cm程度である。底面は全体に被熱により赤変し、埋土は黒色の炭層である。またSP114はSP113を切るように東側に隣接し、深さ20cmで埋土は焼土を多く含んだ暗褐色土である。またSP113の南西1mの床面には40×25cmの範囲で炭層が広がっている。主柱穴は判然としない。遺物はコンテナ4箱分出土しており、弥生時代終末期~古墳時代初頭に位置付けられる。

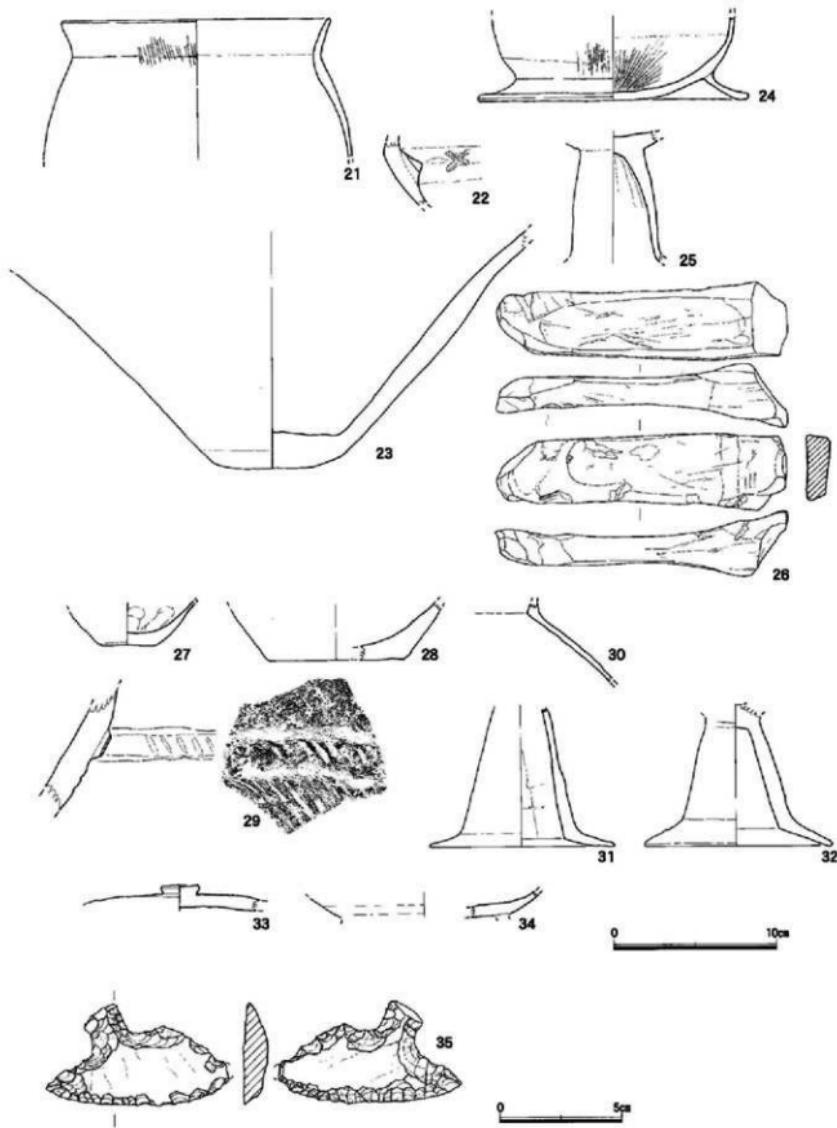
#### 出土遺物 (第11図)

21は甕である。摩滅が著しく調整不明瞭であるが、口縁部から頸部にかけて外面刷毛目が認められる。22はヘラで擣がけに刻んだ頸部突帯である。23はレンズ底の底部である。摩滅が進んでいるが、外面に擦痕が僅かに残る。24は台付の甕であろうか。台は低平で八字状に広がる。甕の底部は丸底である。また内底面に中心部から放射状に縦方向の細かい磨きを行い、中ほどには横方向のヘラナデ状の痕跡が残る。また外面にも痕跡的に縦方向のミガキが認められる。胎土は比較的精良で、砂粒はごく僅か含むのみである。色調はにぶい黄橙色を呈する。25は中膨らみの筒部を有する高环の脚部である。26は頁岩製の砥石である。表面に刃跡が残る。

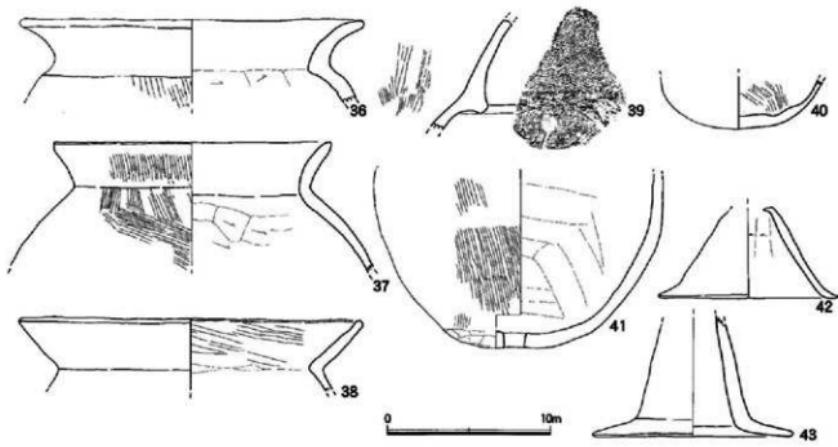
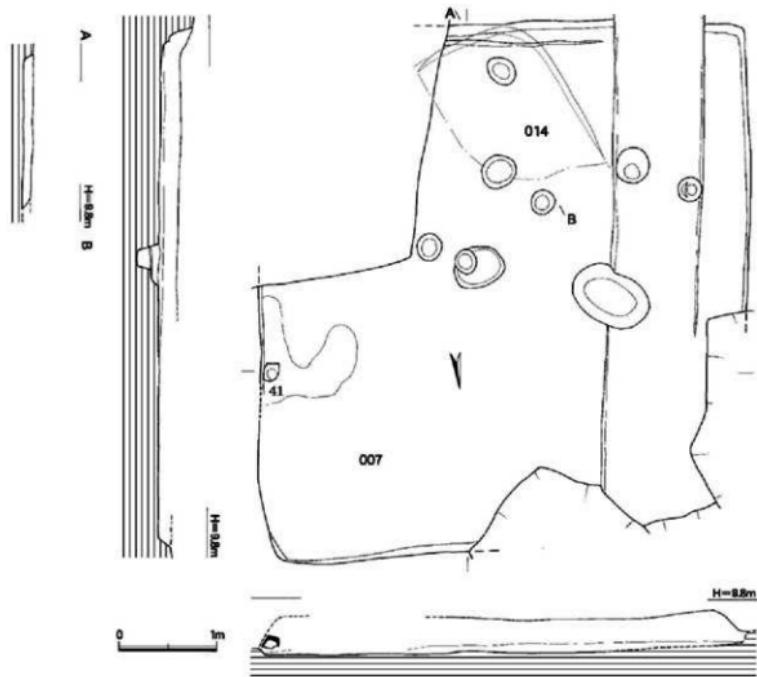
27~35はSC005とSC007の上面から出土したものである。直接SC005に伴うものではないが、時期幅



第10図 SC005実測図 (1/60)



第11図 SC005出土遺物実測図 (35は1/2、その他は1/3)



第12図 SC007・014及び出土遺物実測図 (1/50、1/3)

もありここで掲載しておく。27・28は弥生時代中期の平底底部である。29は胴部破片で、突帯には斜線を刻み、胴部外面には叩き、内面には刷毛目が残る。30は蓋である。器壁は薄く、頸部内面には明瞭な稜が入る。31・32は高环である。33・34は須恵器破片である。33はボタン状のつまみを有する蓋、34は高台付きの环である。33の天井部、34の底部外面には共に回転ヘラ削りが行われる。35は安山岩製の石匙である。

#### SC006 (第9図)

SC005の北西部で検出する。搅乱と切り合いにより南西側の壁の一部しか残っていない。埋土は焼土粒・炭化物を多く含む暗褐色土で、他の豊穴住居跡と比べてやや様相を異にしている。検出面からの深さは40cm弱を測る。出土遺物は僅かで図示し得たものはないが、外面に叩きを有する土師器表破片が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

#### SC007 (第12図)

大半がSC005と切り合っており、本住居跡のラインが不明瞭となっている。埋土は土器小片を多く含んだ黒褐色土で、SC005を切る住居跡である。西側ラインは比較的明瞭に観察できたが、その他は部分的にしかわからなかった。東西長5m、南北長5.35mを測り、床面までの深さ10cm弱を測る。東壁沿いには暗赤褐色土の広がりが認められ、ここには炭化物が少量含まれており、焼成前の穿孔を有する底部が壁際に倒置されていた。竪の痕跡の可能性が考えられるが、粘土などは残っていない。主柱は不明確であるが4本柱になるものと考えられる。切り合い中最新の豊穴住居跡と考えられ、主軸方位も他の住居群とは異なっている。古墳時代前期後半に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第12図)

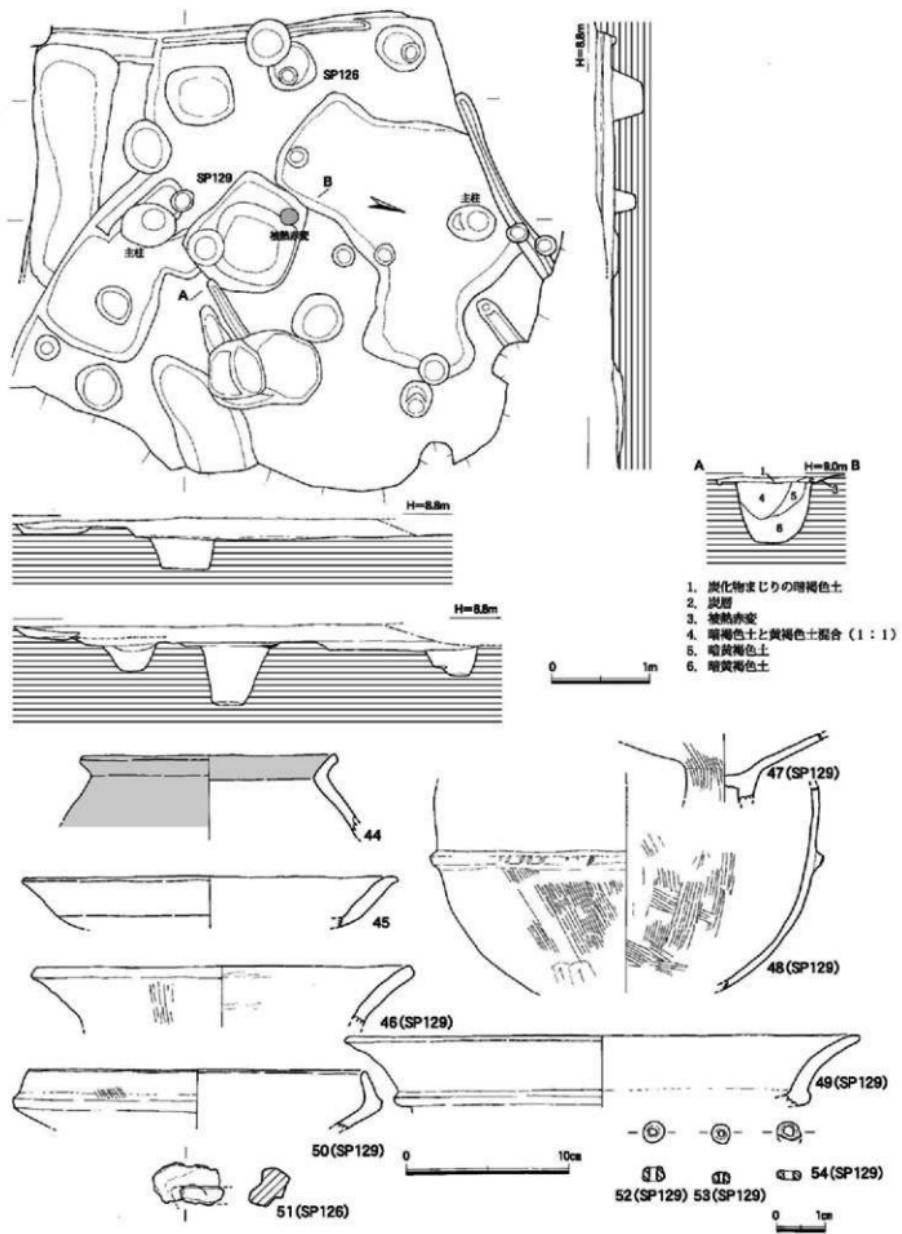
36~38は表である。36・37は口縁部が外反し、38は内湾する。胴部内面はいずれも横方向のヘラ削りが行われる。外面は36・37には刷毛目があり、38は口縁部内面に刷毛目が認められる。39は複合口縁で外面に波状文を施す。40は底部破片である。内面に螺旋状の刷毛目が残る。41は下半部である。外面縦刷毛、内面指ナデを行なう。本来底部中央に1箇所焼成前穿孔が行われているが、焼成後にこの部分を更にはつっている。42・43は高环脚部である。42には筒部内面に横方向のヘラ削りが残る。

#### SC008 (第13図)

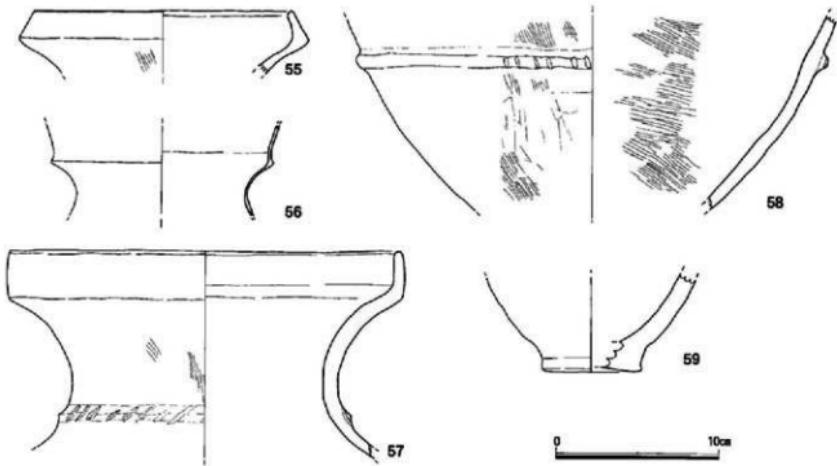
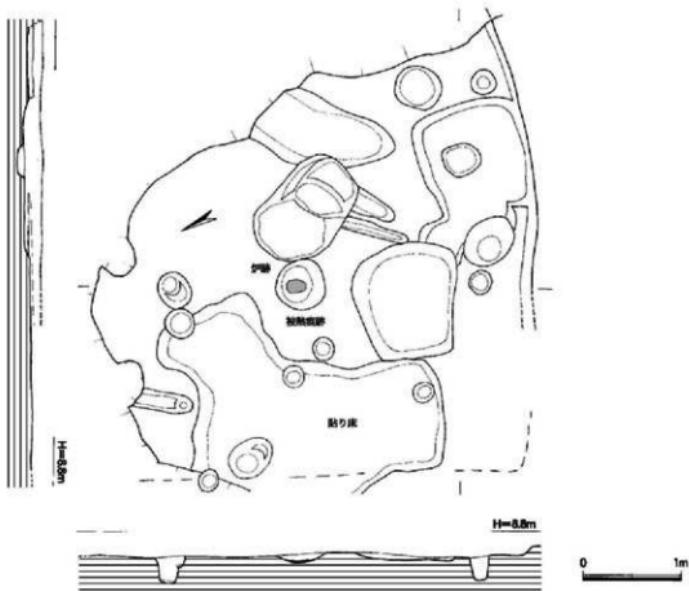
SC005東側床面検出時に確認する。SC005炉跡(SP113)に切られるとともに、SC009にも東側を切られている。SC015との切り合い関係は不明である。埋土は暗褐色土である。SC009との重複部分が多く不明瞭となっている部分が多い。豊穴部分の掘り方は西~南側が検出されている。床面南側には幅1.1mのベッド状遺構が削り出されている。ベッド上南壁沿いには溝状に貼り床が行われている。床面中央には被熱痕跡が残っており、炉跡と考えられる(SP129)。SP129は平面12×1mの隅丸長方形の掘り方で、深さは5cm弱である。被熱痕跡は掘り方のコーナーに寄っており、埋土には炭が多く含まれている。炭層除去後には深さ60cm、平面方形の掘り方が認められているが、炉跡との関連については不明である。埋土は通常の柱穴とは異なり、炭層も認められるため炉跡との関連を想定しておきたい。主柱は2本と考えられ、これから想定できる住居平面形は長軸6m、短軸4m前後に復元できる。出土遺物から弥生時代終末期~古墳時代初頭に位置付けられる。なおSP129埋土を洗浄したところ、4点のガラス製小玉(52~54、1点は欠損のため未実測)が出土した。同様の遺物はSC015 P-1洗浄土砂内から30点程出土しており、注目される。

#### 出土遺物 (第13図)

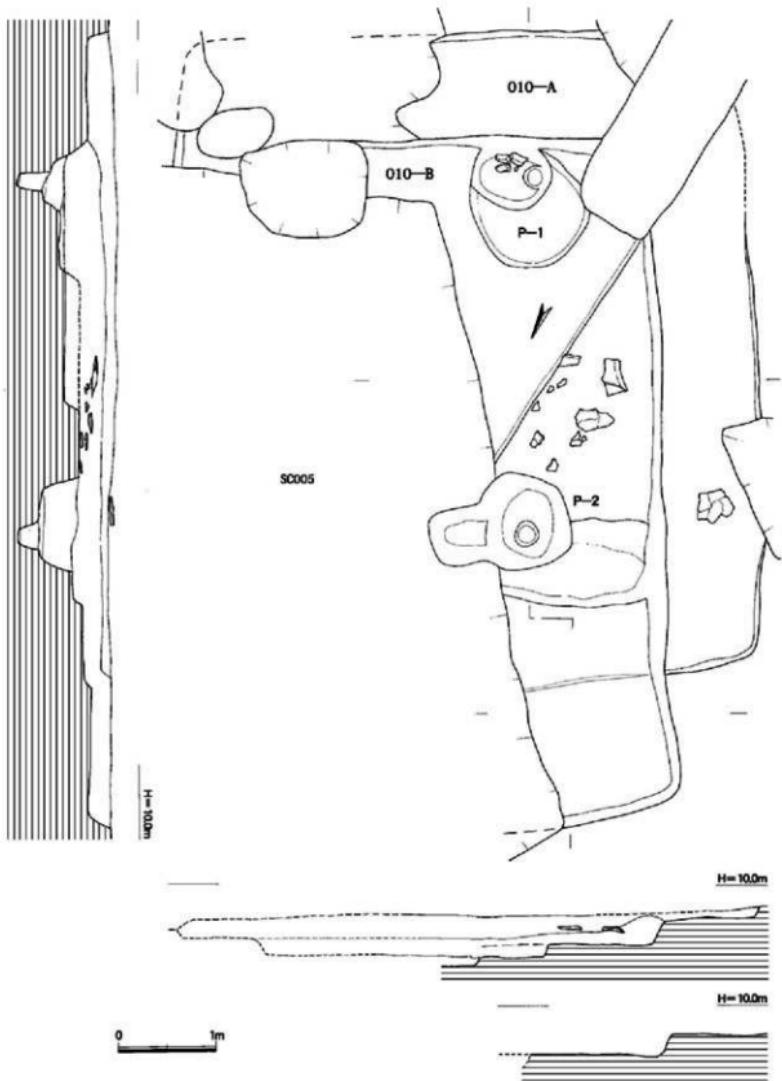
44は丹塗りの表である。45は高环破片である。屈曲部から短く外反する。46は表口縁部である。外面縦刷毛、内面横刷毛が残る。47は高环である。外面には縦刷毛を施す。48は表の胴部である。外面



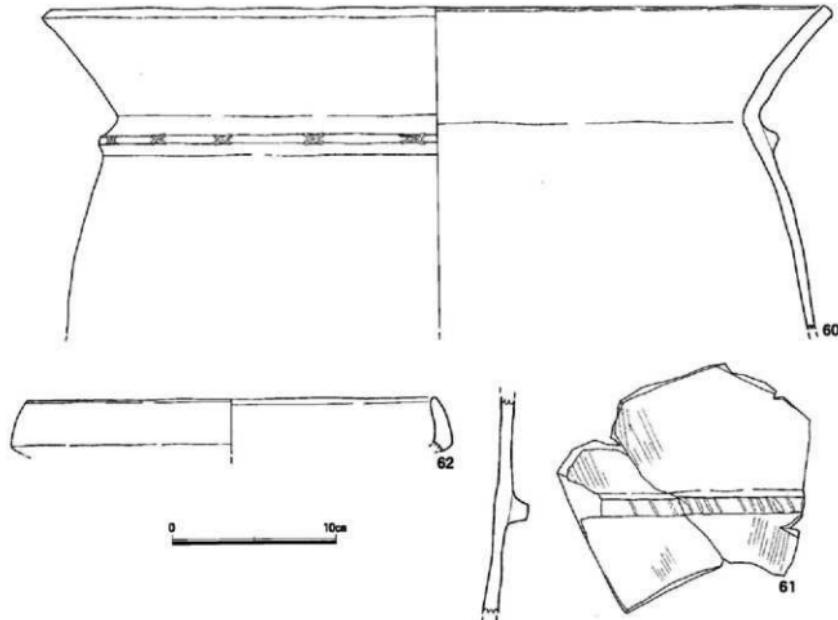
第13図 SC008及び出土遺物実測図 (1/50、52~54は1/1、その他は1/3)



第14図 SC009及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第15図 SC010実測図 (1/50)



第16図 SC010出土遺物実測図(1/3)

には縦刷毛を行い、突帯上面には小口の押圧による文様を施す。内面にも刷毛を行う。49は二重口縁壺の口縁部である。口縁部は外反して広がる。50は複合口縁壺の口縁部である。51は鉄器であるが銹化が著しく、形状は不明である。52~54はコバルトブルーを呈するガラス製小玉である。

#### SC009 (第14図)

SC008→SC009→SC002の関係となる。埋土は暗褐色土で、SC008床面露出後に確認したため、南側の壁面を除いて、平面プランは不明瞭である。床面上に暗褐色土と黄褐色土の混合土による貼り床が行われている。また床面中央付近には径50cm、深さ4cmの炉跡が残されている。底面には被熱痕跡があり、埋土は炭層となっている。主柱穴は不明である。コンテナ2箱の遺物が出土しており、弥生時代終末～古墳時代初頭に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第14図)

55~57は二重口縁の壺である。55は屈曲部より内傾する。56は摩滅が進むが、器壁がきわめて薄く仕上げられており、山陰系統であろう。57は口縁部がやや内傾気味に直立する。頸部に突帯を有し、小口部押圧による文様を施す。58は胴部破片である。内面には細かな刷毛目が施される。外面は縦刷毛を行うが、突帯以下は削りに近い状態となる。59は五様式系の底部である。

#### SC010 (第15図)

北東側をSC006に切られる。埋土は褐色土を主体とし、部分的に暗褐色土と黄褐色土がブロック状に混合している。2基の竪穴住居跡の建て替えと考えられるが、調査時に切り合い関係が不明のまま掘り下げており遺物も混合してしまっている。010-Aの形状は東西長5.8m、南北長6.7m程度を測る平面長方形に復元でき、P1・2の2本主柱と考えられる。炉跡等の施設は確認できていない。また010-Bは先行する可能性が高いが、SC005に切られており、東西長はあきらかでなく、南北長7mを

測る。主柱等は不明である。出土遺物はコンテナ1箱分で、共に弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられるものであろう。

#### 出土遺物（第16図）

60・61は床面出土土器である。明確な接合関係はないが、同一個体と考えられる破片が他にも出土している。共に浅黄橙色を呈し、径1～2mmの石英砂粒を多く含んでいる。60は壺の上半部分である。頸部に突帯を有し、縦状の刻みを施す。摩滅が著しく調整は不明瞭である。61は胴部破片である。断面四角形の突帯を有し、小口による施文を行う。外面に痕跡的に刷毛目が認められる。62は壺の口縁部で、内傾気味に立ち上がる。

#### SC014（第12図）

SC007床面で、黒味を帯びた暗褐色土埋土の整穴住居跡南西コーナー部分を確認した。住居規模・屋内施設等はまったく不明である。弥生時代後期～終末期の小破片が出土している。

#### SC015（第17図）

整穴住居跡群南端部分で検出する。SC008→SC015となる。削平により北側半分を欠失している。埋土は暗褐色土で床面を露出させたところ中央部分に炭化物混じりの土が広がっていた。これを除去したところ炭層を挟んだ不規則な掘り込みとなり、P-1として掘り下げを行い土砂の全量水洗を行った。その結果30点程のガラス製小玉が出土した。また削平部分の北側に2箇所の被熱痕跡が認められた。検出レベルとしては前述のP-1底面とほぼ同一レベルであり、P-1底面に伴う可能性も考えられる。被熱部分の下位は灰白色砂に焼土ブロックと炭化物を少量含む埋土の掘り込みとなっている。今回の調査では灰白色砂埋土の構造はほとんど認められず、この被熱痕跡の帰属については不明である。SC015埋土からは小破片のみがコンテナ1箱出土し、弥生時代終末期前後に位置付けられる。

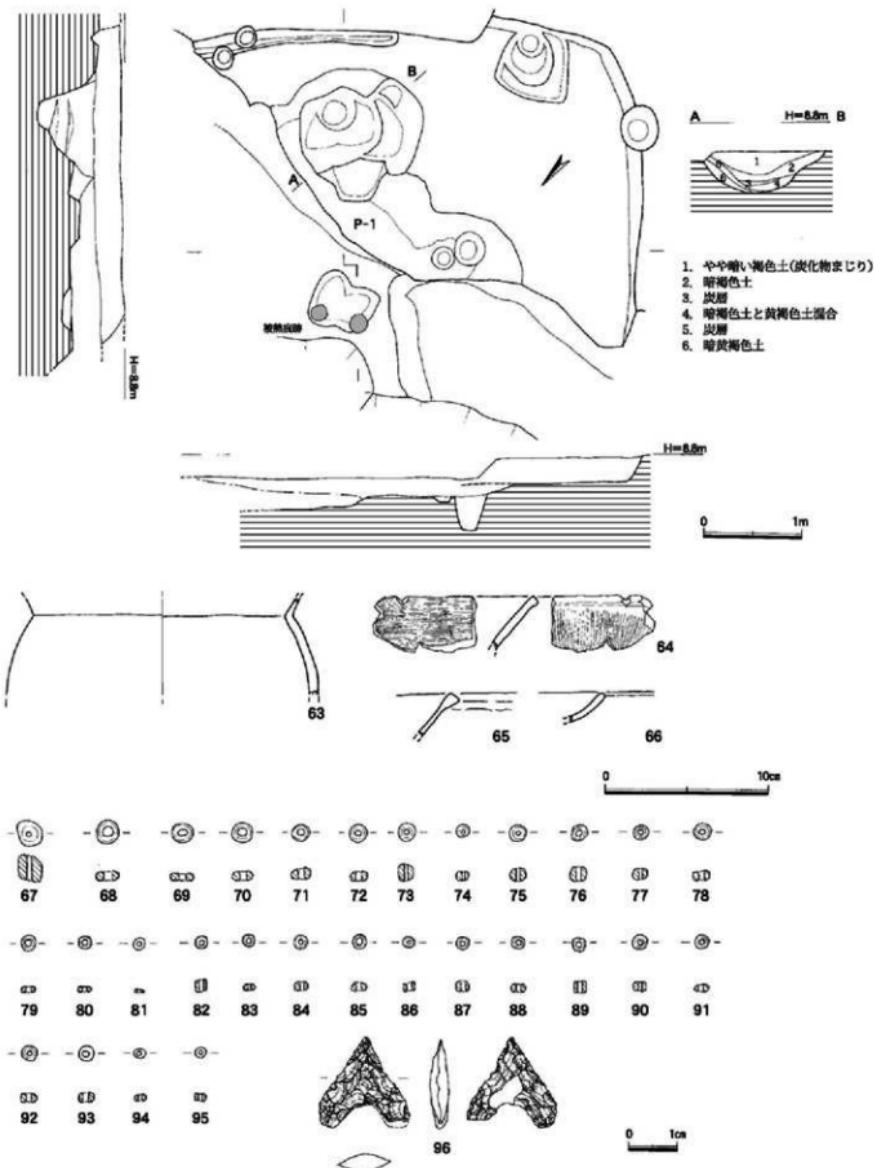
#### 出土遺物（第17図）

63は壺の上半部で、口縁端部は欠失する。摩滅が非常に進んでいる。内面は痕跡的に削りが認められ、頸部は明瞭な稜線を有する。外面の調整は不明である。胴部はやや厚手であるが、口縁部は薄く作っている。胎土には径1～2mmの石英砂粒を多く含んでいる。64は橙色を呈し、胎土精良な腰口縁部である。端部は面取りを行い、外側をつまみ出している。内外面に細かな刷毛目を施す。65も口縁部破片である。端部は折り返して面取りを行っている。胎土には石英微砂粒を多く含む。66は内湾して立ち上がる口縁部小破片である。67～95はガラス製小玉である。色調は67～91がコバルトブルー、92～95がスカイブルーを呈する。96はP-1出土の石鏡である。黒色安山岩（サヌカイト）を素材とする。一脚端を一部欠損するが、ほぼ完形である。なお腹部中央に調査時の傷が入る。現状での長さ18cm、幅18cm、厚さ0.4cmである。両面共に入念な二次調整が施され、素材剥片面を残さない。断面は厚い凸レンズ状をなす。全体に正三角形であり、やや深い逆U字形の抉りが入る。中央から先端に向かい尖り、逆に脚端には丸く収まる。二次調整や形態から縄文時代早期後半期の鍬形鏡であり、この形式では小型の部類といえる。

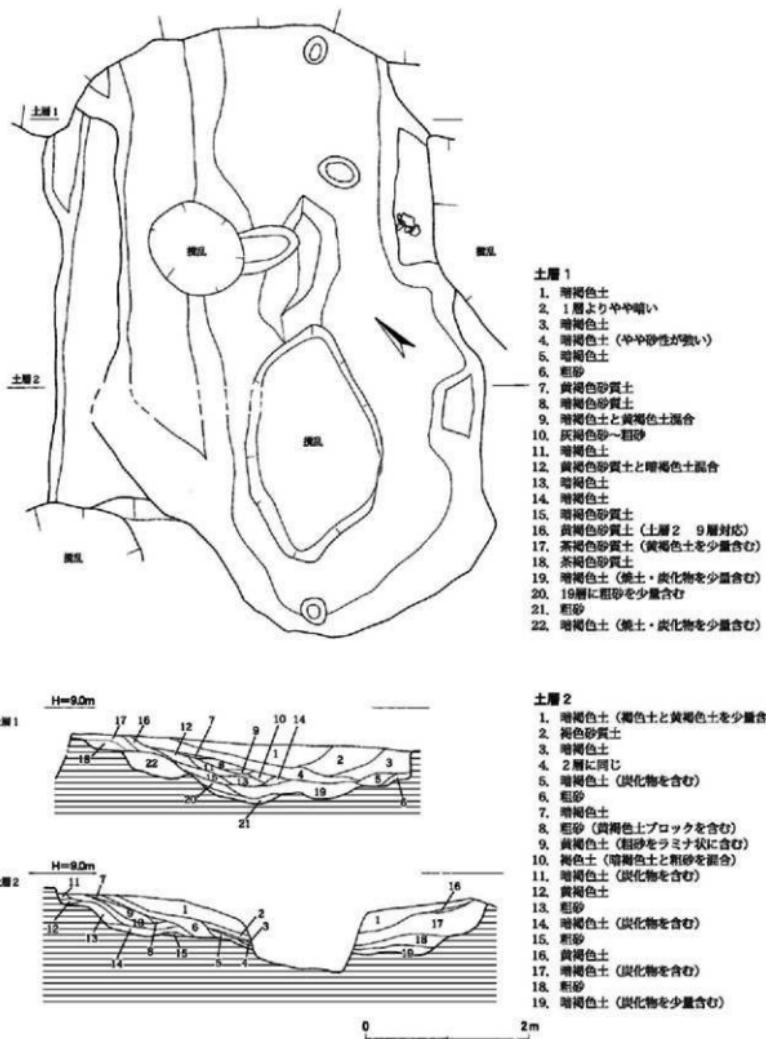
#### 3) その他の遺構と遺物

#### SX012（第18図）

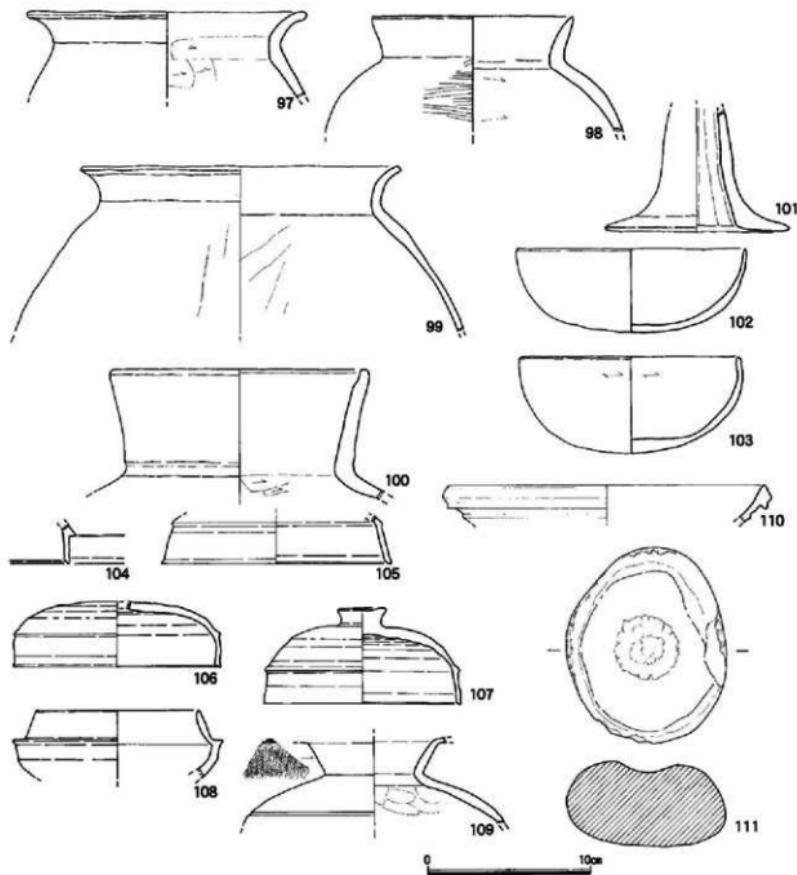
整穴住居跡群から北側に離れた、台地先端部分近くに位置する。幅5.2mを測りやや不整形に北東方向に延びている。壁は北西側では比較的直立する部分もあるが、南東部分は緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が多く認められ、沖積地方向（北東方向）に向かって傾斜している。埋土はレンズ上の堆積を示し、粗砂が多く流入している。形状及び土層図より台地が開拓された部分に形成された流路状のものである可能性が考えられる。土師器、須恵器など小田編年のⅡ期に位置付けられる遺物



第17図 SC015及び出土遺物実測図 (1/50、67~96は1/1、その他は1/3)



第18図 SX012実測図 (1/60)

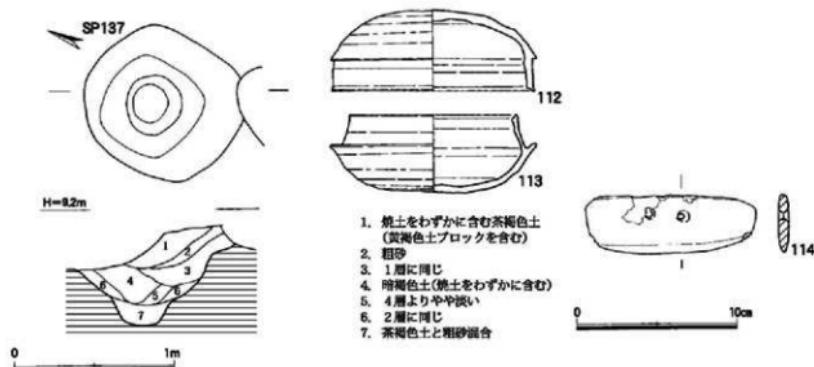


第19図 SX012出土遺物実測図(1/3)

が出土している。

#### 出土遺物(第19図)

97~103は土師器である。97~99は甕である。いずれも摩滅が進んでおり詳細は不明瞭である。内面調整は、97・98はヘラ削りが認められ、99には指ナデ状の痕跡が残る。外面は98に横刷毛が認められる。100は直口甕である。胸部内面にはヘラ削りを行う。101は高環である。筒部は僅かに中膨らみとなる。102・103は椀である。103には内外面に擦痕が認められる。104~110は須恵器である。104~107は蓋である。天井部と口縁部の境には突帯状の明瞭な張り出しを有し、口縁端部内面には段を有する。108は环身である。立ち上がりはやや内傾し、端部は丸く仕上げる。109は甕である。口縁端部



第20図 その他の遺構・遺物実測図 (1/30、1/3)

は更に外側に引き出している。口縁部外面には波状文が施され、胴部外面には沈線が認められる。110は口縁部破片である。端部は玉縁状に作り、下端を垂下させている。また口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける。111は砂岩製のくぼみ石である。

#### SP137 (第20図)

SC005内貼り床土を切る遺構である。平面90×100cmの長方形を呈し、検出面からの深さ60cmを測る。底面には径30cmの柱状の掘り込みが残るが、柱痕跡は認められない。埋土1・3・4・5層には僅かに焼土が含まれるが、被熱痕跡はなく、粘土・炭化物もほとんど認められない。当初竈の下部構造(竈下の掘り込み)の可能性を考えて掘り下げを行ったが、明確な痕跡を認めるることはできなかった。柱穴として報告しておくが、これに対応する柱穴も検出していない。須恵器蓋環が出土しており、小田編年のⅡ期に位置付けられる。

#### 出土遺物 (第20図 112・113)

セット関係となる須恵器蓋环である。遺存状態も比較的良好で、意図的に埋納された可能性も考えられる遺物である。蓋は天井部と口縁部の境には突帯状の明瞭な張り出しを有し、口縁端部内面には段を有する。身は立ち上がりも高く、口縁端部内面に段を有する。

#### その他の遺物 (第20図 114)

出土位置不明の石包丁である。小豆色の凝灰岩製で、孔間2cmを測る。図上左側の穴は穿孔をやり直している。

#### 4) 小結

今回は台地先端部分の調査で、削平も著しく、遺構が面的に残存していたのは完全な削平を免れた調査地点南西側の僅かな部分であった。しかしながらその部分では濃密な生活遺構群が確認されている。検出されたのは弥生時代終末期～古墳時代初期の竪穴住居跡12棟、掘立柱建物1棟、古墳時代前期後半の竪穴住居跡1棟、古墳時代後期の竪穴住居跡1棟、不明遺構1基等である。またその他の時期のものとしては弥生時代中期後半及び古代の遺物が出土している。本調査地点を中心となるのは弥生時代終末期～古墳時代初期の生活遺構であり、著しい削平の度合いを考えると、本来は更に数倍の遺構群が存在していたものと考えられる。また注目される遺物としてはSC005出土台付土器(24)がある。朝鮮半島産の台付直口壺の模倣品と考えられる。



写真2 調査区全景(北から)

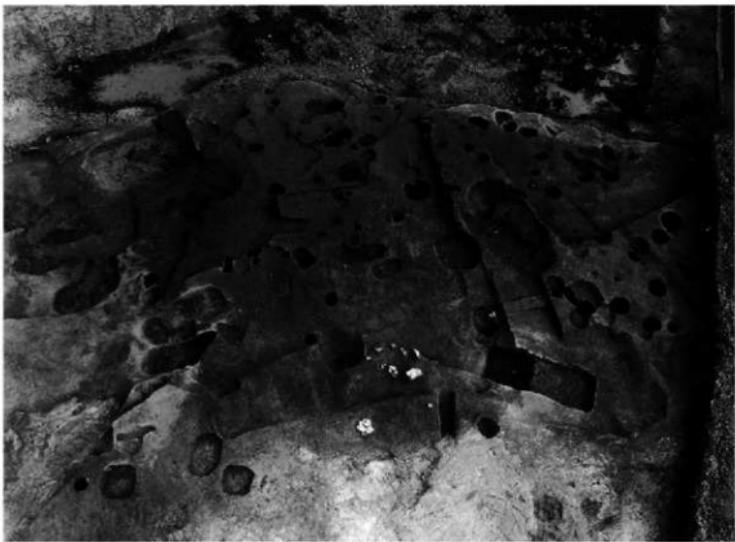


写真3 竪穴住居跡群(西から)



写真4 調査区南側（北から）



写真5 台地縁辺土層



写真6 SC001(南西から)

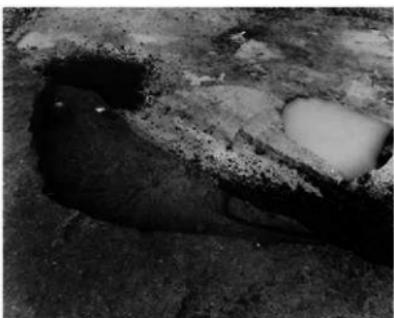


写真7 SC002(西から)



写真8 SC003(北西から)



写真9 SC005(西から)



写真10 SC007(西から)



写真11 SC007遺物出土状況(北から)



写真12 SC008・009(西から)



写真13 SC010(西から)



写真14 SC010遺物出土状況(東から)



写真15 SC014(東から)

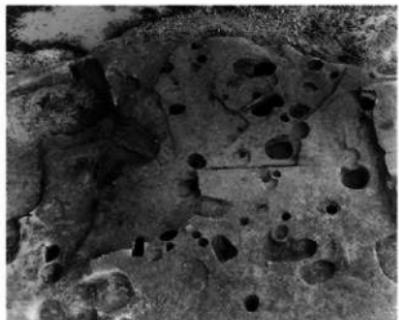


写真16 SC008・009・015(西から)



写真17 SC015(西から)



写真18 SC015P-1 土層



写真21 SP137土層



写真19 SX012 (南西から)

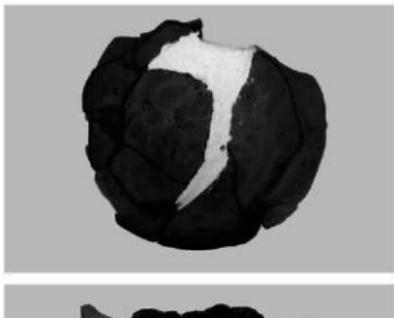


写真20 SC012土層



写真22 出土遺物 (24)

書名ふりがな なかむらまちいせき に  
書名 中村町遺跡 2  
副書名 — 中村町遺跡第3次調査報告 —  
巻次  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
シリーズ番号 891  
編監者名 長家 伸  
編集機関 福岡市教育委員会  
発行機関 福岡市教育委員会  
発行年月日 20060331  
作成法人ID  
郵便番号 810-8621  
電話番号 092-711-4667  
住所 福岡市中央区天神1-8-1  
遺跡名ふりがな なかむらまちいせき  
遺跡名 中村町遺跡  
所在地ふりがな みなみくのま 3 ちょうめ 117・118ばん  
所在地 南区野間3丁目 117・118番  
市町村コード 40132  
遺跡番号 51-0167  
北緯 33° 33' 38"  
東經 130° 24' 51"  
調査期間 20050111-20050228  
調査面積 844  
調査原因 共同住宅建設  
種別 集落  
主な時代 弥生～古墳  
遺跡概要 弥生終末～古墳初期 住居12+建物1  
古墳前期 住居1  
古墳後期 住居1+不明1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第891集

## 中村町遺跡2

— 中村町遺跡第3次調査報告 —

2006年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 協文社印刷㈱  
福岡市西区小戸4丁目24-5